
Holy Brownie CHAPTER EXTRA 『悲しみの「空気」に微笑みを』

冴崎真琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H o l y B r o w n i e C H A P T E R E X T R A 『悲しみの「空気」に微笑みを』

【Nコード】

N 2 1 4 9 I

【作者名】

冴崎真琴

【あらすじ】

六道神士原作『H o l y B r o w n i e』の二次創作。ある夜、現代の痛いお兄さんの元へ訪れたピオラとフィオ。今回の彼らの仕事は…あの有名なA V G『A I R』のS S執筆だった！

（前書き）

～おことわり（必読）～

え、この作品。

内容的に『か・な・り』精神的公害垂れ流しで、某法触発の危険性がある為、『15歳未満の方の』ご講読を『で・き・る・こ・と・な・ら』ご遠慮願いたいかなと『愚申します』。

さらに文面中、多面的に『不快極まりない』発言が多々存在していますが、願う事なら『ふところできく』寛容に読み流して頂きたい思います。

上記内容を了承（1秒）した上で、続きをご講読下さい。

朝露が消え

柔かな日差しの中目を開けると

そこには

全てが整い終りを告げていた

ブラウニー。

それは小さな職人

ブラウニー。

それは小さな

神の使者……

*

夜も更け人々の寝静まる中、その2つの小さな光は、上から下へ天する。

住宅並ぶその中の、ひとつにそれ等は音無く入り、そして小さく弾け、そこから愛らしい姿を現した。

内ひとつが辺りを見渡す。

内ひとつが合いの手をと構える。

そして…先のひとつが口開く。

「庶民的な1DK！」

「いや、ファンタジーだね」

「見渡す限りのエントロピー！」

「生活感、お腹一杯だ」

「棚に並ぶはレアなアレーー！！」

「イっちゃって、既にファンシーか」

「コレの何処が『メルヘン』なのよ！！」

ぐあしつと相方の胸ぐらを掴み、三角帽子をかぶった人形…ピオラは鬼の形相で言い放つ。それに対して二股帽子の頂点に、大きなポンポンをそれぞれ付けた長髪の人形…フィオは表情を変えず、その細い目を向けピオラに答えた。

「いやいや、所帯主の頭がそうなんで」

身も蓋も無い。

「救いようの無い厨房って訳ね…しかも……」

そう言いピオラは改めて周りを見渡す。

乱立するフィギュア。

家庭用、PC問わずの怪しげなソフト。

棚に並べられた、いかがわしき極みの粗書草書……。

「…で、今回の仕事は何？ 坂道、時計台、大樹までは『メルヘン』で許して上げる」

かぶりつきそうな勢いで、フィオの顔を引き寄せるピオラ。その

言葉に、フィオは何だと言いたげな顔を浮べ、

「察しが付いてるみたいだね。そう今回の仕事は……」

と、ここで言葉をいったん区切り、四本しかない指の親指と小指を突き立てこう言った。

「エ・ロ・ゲ」

ザッパーー！！

何処から取り出したのだろうか？ 手にしたカッターナイフによって、ピオラはフィオを一刀両断した。

袈裟斬りに胴体を泣き別れさせられたフィオは、慌てて下半身を掴み、紛失しないように抱え込む。

「日輪の輝きにー…って、芸が増えるよピオラ」

「…やれやれ、何なのよ今回の仕事は。神様ももつと仕事を選んで頂戴つての」

意味不明な事を言うフィオをよそに、ピオラはそう言い溜息を吐く。その後姿を見ながら、フィオは体をホッチキスで止め、あっけらかんと言った。

「いいじゃないの、地味だけど。レアな外庶民招き入れるより楽な仕事じゃない」

「…あんた、そんな仕事もしてたの……」

「いや、その後その大陸、薬まみれになった時には、さすがにコレで良かったのかなーっと思っちゃった」

某共和国、黒歴史。

「その口二度と開くなクズ人形っ！！」

一蹴。

再び惨殺死体さながらの姿になり転がるフィオ…それを尻目に、ピオラは相手に向ってこう叫んだ。

「とにかく！ とつと仕事の概要を話さない！ チャッチャと終らすわよ！！」

「へい」

フィオは気の抜けた声でそう答えると、今度は傍にあったボンドで、その体を繋ぎ合わせた。

*

「え、今そこで爆睡しているオッサン。匿名希望な感じの人で、ハンドルネームが『鬼瓦満丸爆破』さん。どうやら某所に投下する為の『AIR』ってソフトのSS書いている途中で寝ちゃったみたいだね」

「わざとらしさこの上ない状況ね。…で、それを書き上げるのが今回の仕事？」

「そうそう」

ピオラの言葉に縦に肯くフィオ。それを聞いたピオラは、胸を撫で下ろし安堵の息をもらした。

「…良かった…内容の質はともかく、ようやくまともな作業工程が踏めるわ……」

「ホント地味だよな。ファイルの中に『虫』でも入れよっか…」

ギロツ

…ピオラの無言の圧力に、慌てて白旗代わりに首を振るフィオ。

ピオラは表情を変え、すぐさま目の前に輝くPCのディスプレイを覗き込んだ。

「さて、何処まで書いて……」

「ふむふむ」

声を揃える2人。が、目の前の真実に、2人は力無く床に転げ落ちた。

『「そろそろいい加減に寝てしまいなさいや」」

とお母さん。

「にはは」

私。』

……駄文とすらも呼べるのか？

「いや……文学って、ふところ広いな」

「……」

フィオの言葉に答える気力も失うピオラ。フィオは更に言葉を続ける。

「久々のインパクトだよ……10秒は死ねたね」

「日本語の美は何処行つたあ……！」

ピオラはおたけびを上げ、フィオに八当りをかます。その際に使われたシャーペンが、見事フィオの脳天を貫いた。

「ここぞとばかりにボロくしないでよ。お気に入りなのに」

「やかまし……！」

ビツと指差し、フィオにそう告げたピオラは、すぐさまマウスを器用に操り、先程の文章ファイルをゴミ箱に放り捨てた。

「あゝ、やっぱりボツるんだ」

「当然！ リテイクどうこうの問題よ。『主旨』に反するけれど、こうなつたらプロットの隅々から再構築よ……！」

そう言うと、ピオラは再びフィオの方を振り向き、

「1、2世紀ぐらい後でいいわ。その辺から必要な物、取って来て……！」

と叫んだ。

それに対してフィオは、全くやる気無さそうに、腕を頭の後に組んでこう答える。

「また大掛かりな……地味な仕事だし適当でいいじゃない」

「以前私が言つた事の復唱！」

「『本人以上に完璧な仕事するのがピオラ達』ね。あゝさぶイボが立つ」

ざしゅ

再びカッターの一閃がフィオを襲う。それは両腕ごと見事に額から上を跳ね飛ばした。

「ああ！ またしてもレトロなロボのギミックがつ！」

「無駄、ロスはもういい！！ さっさと行かないと、ピクセル単位で分解すわよ！！」

「ピクセルは平面解像度だよ…って、わわっ。行ってきたっす！！」
ピオラの怒気に恐れをなして、フィオはそう言い逃げるように飛んでいった。その姿にピオラは溜息を吐くと、自分は自分で、成すべき作業をこなす事にした。

*

「えゝ、コレで最後だよ」

「こっちも大体終ったわ」

フィオが持ってきた材料を、なれたように操り組み上げていくピオラ。ただ乱雑にゴミが広がっていただけの部屋の中央に、重々しい器材が作り上げられていた。

「それにしても、たかだか小話ひとつの為に、軍用多次元立体戦略シミュレーターを使うなんて、一体何処の誰の気の変わり様で？」

「たかが腐れヒッキーのアニメス補完の為に、自分のシナプスを使用したくないだけよ」

「あゝ、のっけから自棄^{ヤケ}なんだゝ」

ピオラの言葉に納得するフィオ。ピオラは、そんな相方を無視して作業を進めた。

「マスタリング開始。基本、キャラクター設定入力。人物背景^{バックボーン}による各キャラの設定値補正。仮想領域展開後、各モデリングの設置、動作確認、後にデバックモードに移行…と」

大まかに作業を進めた後、ピオラは溜息を吐き目線を下へと落す。そして、そこに置かれている設定資料を見て、げんなりとした口調で呟いた。

「…にしても、見れば見るほどヤになるわね」

「紙面がごわついているのもまた一興かな」

「そんな視嗅覚的な事じゃなくって。…設定よ、設定」

そう言い、足元に置かれている物のページのめくる。

「少女の呼び方は女童めわらわじゃなくって『女童めわらわ』。女童めわらわと呼ぶのはもつと後の時代よ。それに何コレ。儒教、道教、何処行った!」

「輪廻云々のアレね。いいんじゃないの? ファンタジーなんだし」

ひた…

フィオの頬に、心無い刃があてられる。

「何時から『独善』と同意語になったのよ」

「いや…、日本語って、地殻変動並に変わる物だし」

「公国最後の栄光になりたい?」

「…既に完成版なので結構です」

冷汗を流すフィオ。ピオラはカッターをおさめ、そして器材の方に向き直した。

「じゃ、デバック作業に入るわよ」

「え…! めんどくさ…」

「無駄毛処理を怠って、『完璧』な物が作れるか!」

「ホントに大雑把かマメなのか……」

彼等はそこで会話を切ると、自らの意識を情報化して、シュミレーターの中へと入っていった。

*

シュミレーターの内部には、『AIR』の舞台となるあの町を模

して作られた空間が広がっていた。

2人はその箱庭の完成度を確認する。しばらくして、それらに不備が無いと判断したピオラは、早速シナリオ制作に入った。

「各思考ルーチンフル回転！ 無指向性イベント制作開始と同時にLAN回線解放！ Web上に点在する同作品関係の公開文献と照合し、算出結果と類似、照合した物を自動で制作リストから隔離！
！…ま、こんなモンね」

そう言い、汗を拭う仕草をするピオラ。フィオはそんなピオラに對し、こう問い掛けた。

「何でまた、そんな面倒な設定をするんだい？」

「ど〴〵せやるなら、まだ誰も提示していない作品をアップした方がいいでしょ？ そこまでやって完璧よ！」

得意げにそう言い胸をはる。そして更に言葉を続けた。

「『マンネリ』って言葉があるように、人の想像力つてのにも限界があるわ。それに引き換えこっちは200年進んだ超一人工偽脳（AI）！ いくらなんでも500万個以上の構想を算出すれば、未発表のネタがごまんと……」

「ピオラ…ピオラ」

優々と語るピオラの裾を、フィオはそう言い軽く引つ張る。相手が自分の方を向いたのを確認すると、フィオはゆっくりと空中に映し出されたリストを指差した。

「鎮圧完了」

フィオの言葉と同時に、ピオラはその場に崩れ落ちる。そのリストの中央には、

『NO DATA』

と言う文字が、デカデカと赤く点滅していた。

「やゝ、さしものスーパーAIも、人の煩惱には勝てないかゝ」

腕を組み、さも愉快そうにそう語るフィオ。

「さすがはオタク大国ニッポン！」

「悪評で日本を語るな！！」

ピオラは起き上がりざまにそう叫び、フィオのアゴめがけて正拳を打ち込んだ。

…とは言え。

「参ったわ。時間もおしてるってのに」

「ここは月並みに『総ナメ』で行くしか無いね」

…『モズのはやにえ』と言うのは御存知でしょうか？

「『未使用』キャラだって居るし、ちょうどいいと思うんだけどな
~~~~！！」

「だあつとれ、下衆人形！！」

傍の木の枝に縫いつけられているフィオに対し、ピオラは強くがなりつけた。

「今真剣に打開策考えてんのよ！ 大体そんな3流ネタは、最終手段よ、最終！！」

「却下と言わない辺り、大人だね」

「黙れやソコ！」

そう言いピオラは再び思案にふける。それを見ていたフィオは、仕方ないと言った風に、相手に向ってこう声を掛けた。

「じゃさ、こんなのはどうか？」

フィオは手元に必要な情報を引き出し、それを2、3書き換え始める。

「え…神奈から観鈴に転生するタイミングを見計らって…翼人の記憶を」

## 圧縮。

「過負荷のでかい情報は、記憶野を始め多岐に渡って障害を起こしちゃうからね。不要データは即圧縮！ 情報処理の基本だよね…あ、もしかして新発想？」

「売国奴！！」

愚の極みとも言えるフィオの行いに、ピオラは怒りの斬撃を御見舞した。

「口くでもない事を！ 考える脳味噌何処やった！！」

「えゝ、斬新だと思うけどなゝ」

「希薄かつ唯一の柱へし折って何言うかー！！」

ありったけの声を張り上げた後、ピオラはその場に力無く座り込んでしまう。

「はははゝゝピオラ初のお仕事失敗かもゝゝゝ」

「まあまあ。それより見てみなよ」

絶望に打ちひしがれている相方に、フィオはそう声を掛け、キラ達の方を見るよう促す。

そこには、いかなるしがらみにも囚われていない、愛らしい観鈴の姿があつた。

名も無いエキストラな親友と談笑を交し、家に帰れば母親が居て、しばらくすると下宿人らしい男が現れ…彼と共に買い物に向う。

謎の米袋を抱えた母娘と世間話を交し、幼馴染みらしい病院を経営する姉妹と出会って…そして何よりも少女は、その笑顔を絶やさずにいた。

「生きてる間も、生まれ変わる時も、人はその記憶を小さくまとめ蓄える…。楽しい事も、悲しい事も。そして全てが終る時、人はその記憶を解き放つ」

フィオは静かにそう語った。

「…確かそうだったわね。それに意味があるのかは分からない…けど、肉体が『血』を繋ぐように、魂もそうやって繋がって行く。それが本来の『輪廻転生』リンカーネーションだもんね」

ピオラも…フィオの言葉に同意する形でそう言った。

「…が！ 今回はそんな10t級な御題じゃないのよー！！」

「まあまあ…あ、そろそろ時間のようだねゝ」

ピオラの追求を逃れるように、フィオはそう言いシュミレーター

の外に逃げ出した。それを慌てて追いかけるピオラ。

外に出てみると、フィオが器材からデータを取りだし、それをP  
Cに流し込んでいた。

「登場人物2名追加…つと、こんなモンかな？」

「…モンかなって…！ まさか今回の仕事のログを、そのままデ  
キスト化したんじゃない！」

「当り」

悪びれも無くそう答えるフィオ。ピオラは口を半開きにして呆れ  
返った。

「やゝ、読み返すとなかなか面白いよ。客観視って楽しいね」

「『ね』じゃない！！ 楽な生き方すなー！！」

「いいじゃない。どうせ二次創作なんだし」

「そんな考えでいるから、『同人屋は責任能力無い』って言われん  
のよ！！」

「シュールだね」

…などと会話を交しながら、彼等は再び光をまとい、天高く舞い  
上がった。

後に残る静けさ。

ひとつだけある窓から、朝の日差しがさし込んで来る。

いつのまにか無くなっている器材…そして今なお光々と輝く、P  
Cのディスプレイ……。

その画面上に書き上げられた文章。その最後にはこう…したため  
られていた。

そして彼等が去った後には

何かが終わっている。

（後書き）

激しく古い作品です。

実は昔、某所に投稿した物なのですが、折角だからとこちらにも投稿させて頂きました。

キャラ崩壊、設定崩壊の好き放題ですすみません。

こんな拙い作品ですが、ちょっとした合間の息抜きとなれば幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2149i/>

---

Holy Brownie CHAPTER EXTRA 『悲しみの「空気」に微笑みを』

2010年10月10日07時08分発行